



MONDAY, JUNE 15, 2020 VOL. 4

## 哲学系諸学を学ぶすべての学生が身につけるべき素養

日本学術会議哲学委員会は、哲学系諸学を学ぶすべての学生が身につけることを目指すべき基本的な素養について取りまとめている。概要は以下の通り。

哲学系諸学が包摂する領域は多様である。そのため、学生は各領域の特性に応じた学修課程を選択することになるが、いずれを選択した場合においても、以下のような基本的知識・能力・知的態度の獲得が目指される。

哲学は、物事の原理的な理解への志向、学問分野の枠を超える知的横断性を特徴とする。哲学においては「真、善、美、聖」に関わる「世界に何が存在しているのか」「私たちは真理を知りうるのか」「正しい思考のあり方とは何か」「知は主観的か客観的か」「人間とは何か」「生きるとは何か」「幸せとは何か」「善悪とは何か」といった、すべての領域にまたがる横断的かつ根本的な問いが問い進められる。そして、その思索は、自分の生き方や現代社会のあり方を自明視せずに、深く吟味し問い直す反省的探究に結びつく。

したがって、哲学の学修過程においては、古今東西の哲学者や思想家、著作家、芸術家、宗教家がどのような思索を行ったかについての知識と、そうした先行者の思索に触発されつつ思考を深めるための能力、そしてその結果を現代における新しいものの見方や価値観と照らし合わせ、結びつけながら自らの拠って立つ基盤を問い直し、自らの実践の糧とする態度の三者が必要である。と同時に、哲学の学修がこれらの知識・能力・態度を養う重要な機会ともなる。

これらの三者が結びつくことにより、哲学の学修は、第一に、学修者自身がよりよき生を構築する礎になる。同時に、哲学の学修は、学修者にとって職業的意義・社会的意義も持つ。現代の職業生活も社会生活も、異なる価値観・思考態度を持つ人々との明晰で闊達な対話が不可欠だからである。こうして、哲学の学修によって身につけられた知識・能力・態度は、人々が協同してよりよい職業的実践を行い、最終的にはよい社会を実現する礎ともなる。

## 哲学系諸学の定義と固有の特性(科学哲学領域)

日本学術会議哲学委員会は、哲学分野の参照基準検討の一環として、哲学系諸学の定義と固有の特性を取りまとめている。科学哲学領域の概要は以下の通り。

科学哲学は、次の三つの目的をもった分野である。第一に、科学哲学は、哲学の古典的問題とくに存在論的問題と認識論的問題を、科学的世界像と科学的知識という領域に見いだし、それを解決しようとする。第二に、科学哲学は、科学の特定の分野(生物学/物理学/数学等)と協力して、その基礎となる概念や原理の吟味、方法論の分析と整備、分野全体の鳥瞰図の作成、異なる分野間の関係づけなど、科学諸分野が必要とする基礎作業を行う。

この意味での科学哲学は、科学の一部でもある。第三に、科学哲学は、科学という現象を科学する様々なメタ科学（科学史、科学社会学、科学技術社会論、科学計量学、科学の認知科学、科学人類学、科学技術倫理、研究者倫理等々）の基礎部門としても位置づけられる。どのように位置づけるかによって、科学哲学が第一義的に貢献する対象は異なってくる。

第一の位置づけの場合には、あくまでも哲学者が貢献対象になる。第二の位置づけの場合には、現場の科学者、第三の位置づけの場合には、科学の「シビリアンコントロール」の確立を通じて、市民社会全体が貢献の対象になるだろう。しかしながら、どの位置づけを採用するにせよ、一般に受け入れられている基本的な概念や原理・方法論を当たり前のこととせず、根本に遡って吟味する、事実を明らかにするだけでなく規範的問いをも探究主題とするという特質が、科学哲学をやはり「哲学」たらしめている。

---

## 哲学系諸学の定義と固有の特性(倫理学領域)

日本学術会議哲学委員会は、哲学分野の参照基準検討の一環として、哲学系諸学の定義と固有の特性を取りまとめている。倫理学領域の概要は以下の通り。

倫理学は、「真・善・美」の探究という哲学の古典的区分の中における「善」の部分、すなわち、道徳的な価値や規範、人格について哲学的に探究する哲学の一分野である。その点で、法的な価値や規範について哲学的に論じる法哲学と隣接する「倫理学」は、一方では、道徳に関する基礎概念（倫理、規範、価値、徳、義務、正義、自由、意志、人格など）を概念的に吟味し、行為や性格の倫理的評価として道徳的判断の根拠を哲学的に問うとともに、他方では「倫理思想史」というかたちで、古今東西の生き方の伝統を歴史的に通覧する中から、「生きられたモラル」を探究する。

従来は、倫理学の探究の中軸をなすのは、道徳的規範の実質的な内容や道徳判断の規準となる道徳の原理を問う規範的倫理学であった。しかし同時にまた、「道徳言明は何らかの道徳的事実についての判断なのか」といった問いをはじめとして、道徳判断・道徳的言明に関して、概念的、言語的、形而上学的な立場から考察することも倫理学的探究の重要な軸となってきた。こうした探究は、道徳についての言明を一階上の距離をとった視点から分析しようとするために、近年では「メタ倫理学」と呼ばれて、規範倫理学と区別されることもある。さらに20世紀の後半になると、社会構造の複雑化や技術の飛躍的な進展とともに、様々な社会事象への規範的対処を考究するために、生命倫理、環境倫理、情報倫理、ビジネス倫理・職業倫理、工学倫理等をめぐる「応用倫理学」が、探究の領域として重要になっている。

---

## 哲学系諸学の定義と固有の特性(美学芸術学領域)

日本学術会議哲学委員会は、哲学分野の参照基準検討の一環として、哲学系諸学の定義と固有の特性を取りまとめている。美学芸術学領域の概要は以下の通り。

美学(芸術哲学)は、「美」という価値についての哲学的考察、またとりわけ美ないし美的な価値に関わる人間の営みとしての「芸術」についての哲学的考察を主題とする。また、日本で「美学」と訳されている語は、もとは古代ギリシア語の「感性」に由来する学問名であるところから、近年ではとくに、サブカルチャーも含めた日常的な美的文化・表象文化現象の全般について、われわれの感性の作用とその限界を見きわめる「感性学」としての側面が目ざされている。

日本の多くの大学は、しばしば「美学美術史」あるいは「美学芸術学」という講座名をもち、これを哲学系の学科に設置するという、欧米にはあまり見られないかたちをとる。これには以下のような理由がある。(世界の、そして日本の)

芸術諸ジャンル(美術、文学、音楽、演劇、映画など)の研究としては、芸術理論(美術理論、文学理論、音楽学、演劇論、映画理論など)や芸術史(美術史、文学史、音楽史、演劇史、映画史など)―これら芸術諸ジャンルの理論と歴史研究を総括して「芸術学」ということがある―があるが、これらの研究領域が前提としている「美」「芸術」「美術」「作品」「作者」「様式」「価値評価」といった概念は、いずれも優れて哲学的な概念である。そして、これら諸概念の意味するところを原理的に考究するのが「美学(芸術哲学)」である。

一方で、個々の芸術作品はそれが創られた時代の宗教観、世界観、思想を濃密に表現することで人類の精神文化の中心の一つをなしており、その歴史的・実証的研究には美学(芸術哲学)はもとより、哲学、思想史、宗教学等を必要とする。もちろん、美術史をはじめとするこれら芸術諸学の研究なしには美学や芸術哲学も成り立たないのは、言うまでもない。日本の大学が美学と美術史、あるいは美学と芸術学をひとつの講座に統合するのは、この点を意識した構成を取るからである。もっとも文学に関しては、日本文学や外国文学の講座が別途設けられており、大学によっては音楽や演劇、映画に関しても音楽学部や芸術学部といった専門学部・学科が設置されていることもある。

---

## 哲学系諸学の定義と固有の特性(日本思想史領域)

日本学術会議哲学委員会は、哲学分野の参照基準検討の一環として、哲学系諸学の定義と固有の特性を取りまとめている。日本思想史領域の概要は以下の通り。

日本思想史(学)は、この列島上で展開された様々な知的な営為、および「日本的」な価値観・世界観の形成過程とその独自性を、多様な方法を用いて、歴史的な視点から客観的に明らかにしようとする学問である。

日本思想史は、体系的・論理的な思考がかならずしも十分に発達することのなかった世界をフィールドとするため、高度に体系化された狭義の思想・哲学だけでなく、民間伝承や習俗、建造物・芸術作品・儀礼などに内在する論理化されない意識(広義の思想)までを研究対象に含めることが一般的である。それは他方で、日本思想史という学問に、素材と資料を共通のベースとする、歴史学・文学・宗教学・民俗学・美術史学などの近隣領域との緊密な交流と相互乗り入れという特性を付与することになった。

日本思想史は、戦前・戦中の国威発揚を目的とした日本精神の闡明運動と、敗戦にともなうその挫折によって大きなダメージを被った。そのため戦後の学界では、学問としての客観性を確保すべく、歴史的視座の強化や比較思想論的方法の導入など、日本思想を対象化・相対化するための様々な試みがなされてきた。

---

## RE、オープンアクセス改善のための資金プロジェクト

リサーチ・イングランド(RE)は、大学、研究者、図書館、出版社が、オープンアクセス可能な出版物をさらに多く出版し、そしてユーザーがより便利に利用できるようにするため、新たなリサーチ・イングランドの資金プロジェクトを立ち上げている。本プロジェクトは、世界的な研究への広範なアクセスを可能にし、その影響を拡大するもの。

コベントリー大学が主導するパートナーシップである「COPIIM」は、以下で構成されている。バークベックカレッジ、ロンドン大学、ランカスター大学、トリニティカレッジ、ケンブリッジ大学、オープンアクセス可能な出版社で構成されたコンソーシアム、カリフォルニア大学サンタバーバラ校図書館、ラフバラ大学図書館、インフラ提供者、国際的なメンバーシップ組織であるDPC。

REは、COPIIMに対し、220万ポンドをリサーチ・イングランド開発基金から授与。この出資は、研究の革新と高等教育での知識の共有を支援し、公共の利益をもたらす。COPIIMは、競争的な商業運営モデルから、より水平的で協力的な知識共有モデルに移行することで、オープンアクセス書籍出版を変える。そのために、①オープンアクセス書籍出版社及びオープンアクセス書籍への移行を行う出版社に使用されているインフラ(ビジネスモデル、保管の仕組

み、ガバナンス手続)の改善と革新、②図書館員、出版社、研究者、およびオープンアクセスの展望に関係する者との間におけるより生産的な協働、③オープンアクセス書籍出版を運用するのに必要なスキルを開発するためのオープンソースツールキットを創造、等によってオープンアクセスの機会を拡大する。そして、特に英国内及び国際的な人文学・社会科学分野において、多様で新たな取り組みやモデル等を発表することを支援、維持し、大学および研究者が管理する持続可能な出版モデル、出版オプションの増加、およびコスト削減方法を提供する。

## イギリス国家統計局、大学卒業生の三分之一は教育過剰

イギリス国家統計局(Office for National Statistics:ONS)は、「大学卒業生の三分之一が、現職に対して必要以上の教育を受けている」と発表している。

2019年に発行された国家統計局の四半期ごとの経済報告によると、大学卒業生の約三分之一は、卒業生が就いている職業に対して必要とされている以上の教育を受けている。その割合は1992年以前の卒業生の内では21.7%に過ぎなかったのが、2007年以降の卒業生の内では34.2%まで跳ね上がる。この数字は、必要以上に高学歴である割合が、25歳～34歳までと35歳～49歳までの年齢層で高くなることを示している。また、このデータは、教育過剰が短期間の現象ではなく、未だに29.2%の卒業生が、卒業後5年間で就いている職業に対して教育過剰であることを示している。

ロンドン、労働者の教育過剰の割合が最も高い地域だった。これは、部分的にはロンドンの移民労働者の割合が比較的高いことによるものであり、今回の発表の対象である典型的な教育過剰のグループであることを示している。今回の発表を受けて、ONSの上級エコノミストは「教育過剰は最近の卒業生の中でさらに広まっているが、この状況はしばらく前に卒業した人々にとっても普通のことである。我々の発表は、芸術や生物学、人文科学を学んだ人々は学歴と釣り合いの取れない現職に就いている可能性が非常に高いであろうことを示している」とコメントしている。また、BBCは以下の通りに報道している。

ONSは、「今回の発表は、教育は能力を測るもので、技能と能力を区別するものではないことを推定している」と述べている。また、このことは生産性を測るものとしての賃金を推測しており、この調査が、教育過剰が労働者の給与に影響を与えるかを示すものではなく、「もし人は、職務条件以上の学歴を有するものであれば、教育過剰は一般的であるかもしれない」とも述べている。しかし、教育過剰とは労働者の技能や知識が活用されていないことを意味するために用いられる言葉である。また、「教育過剰は失業の形態とみなされ、それゆえに労働市場の停滞に結びつくのである」と述べる国家統計収集家もいる。しかし、これまでに発表された政府データによると、学位は高収入をもたらすだろうし、学位が二つとなればさらなる収入を得るだろう。大学院卒業生は、一般的に学位のない者よりも、30歳までに9,000ポンドないし約40%以上稼ぐことを示している。このことは、学士課程卒業生と卒業していない者との間での年間4,500ポンド(約21%)の2倍もの格差になっている。

### 【主要支援先】

独立行政法人日本学術振興会  
公益財団法人日本学術協力財団  
公益財団法人菊葉文化協会

東京藝術大学130周年記念プロジェクト  
東京大学新図書館(AC)計画  
京都大学貴重資料デジタルアーカイブ

三思会

three-thought.com

